

話者の視点に立った「やりもらい表現」の教授法 — 「感謝」を表す「くれる」と「依頼」を表す「もらう」 —

鹿浦 佳子

小村 親英

要旨

日本語初中級文法項目の「やりもらい表現（授受表現）」の導入に際して、動詞「～あげる（やる） / ～くれる / ～もらう」、補助動詞「～てあげる（やる） / ～てくれる / ～てもらう」と三種類の授受行為の方向性（誰から誰に授受が行われるのか）についての使い方を習得する。同じ「やりもらい表現」でも英語では“give”と“receive”の二項対立であるのに対して、日本語では「あげる / くれる / もらう」と三項対立になっている。そのため、英語を母語とする日本語学習者にとっては、この「やりもらい表現」の習得が難しくなっている。特に、「～（が）くれる」と「～（に）もらう」の正しい使い方が定着していないようである。実際、本大学に在籍した留学生を対象にした調査でも、授受補助動詞「～（が）～てくれる」と「～（に）～てもらう」の違いを正しく理解して使える学生が少なかった。これは、ある恩恵・利益の授受行為の方向性を話者の視点から主観的に把握する日本語に対して、話者が授受行為を客観的に俯瞰する英語との違いに原因があると考えられる。つまり、授受行為を客観的に俯瞰する傾向にある英語では、話者の目を通して見る授受の方向性の違いには関係なく、「～（が）～てくれる」と「～（に）～てもらう」のどちらを使ってもその授受行為を表現できるからである。この授受方向性についての状況把握の相違が「やりもらい表現」習得の難しさに繋がっていると考えられる。そこで、本発表では、日本語の持つ話者の視点で見た主観的把握を基底にして、「～（が）～てくれる」と「～（に）～てもらう」が本来持っている意味上の違いを強調する教え方を提案する。主に「感謝」を表す「～てくれる」と、「依頼」を表す「～てもらう」の使い方に留意し、その特徴を強調する教え方の一試案を提案する。

【キーワード】 授受動詞・主観的把握・客観的把握・謝辞と依頼・文型至上主義

1. はじめに

日本語の「やりもらい表現（授受表現）」の習得には「～（て）あげる」「～（て）くれる」「～（て）もらう」という三項対立の動詞（補助動詞）を一つのセットで紹介し、その使い方を導入する場合が多い。一方、英語では同じ「やりもらい表現」でも“give”と“receive”の二項対立になっている。それ故、英語を母語とする日本語学習者にとって、「やりもらい表現」の習得が難しい文法項目の一つになっている。「～（て）あげる」と「～（て）もらう」が“give”と“receive”にそれぞれ対応することは理解できるけれども、なぜ「～（て）くれる」がもう一つ存在するのかという疑問である。

英語を母語とする日本語学習者にとっては“receive”に対応する英語対訳「～（に）～（て）もらう」を使うことが比較的安易に習得できるのに対して、“give”に対応する「～（が）～（て）あげる」と「～（が）～（て）くれる」の使い方に混同が見られるのはこの三項対立と二項対立の違いが原因であると考えられる。また、「～（に）～（て）もらう」を使う授受行為は普通“receive”を使って英語対訳されるが、同じ授受行為でも「～（が）～（て）くれる」を使うものは“(somebody) gives (me)”と“give”を使って訳される。この場合、「～（に）～（て）もらう」と「～（が）～（て）くれる」の相違点に関して、話者の目から見た授受行為の方向性「話者の視点」（誰から誰に恩恵が移動するのか）という概念も考慮に入れなければ正しい表現ができないからである（藤田 2000）。

実際、本学に在籍した留学生を対象に行った調査（話者が受益者として、ある授受行為を表現する）でも「～（が）～てくれる」と「～（に）～てもらう」を正しく使える学生が少なかった。特に、その授受行為が誰から誰に向けて行われたものであるかを把握し、「～（が）～てくれる」か「～（に）～てもらう」かのいずれかを使って正しく表現できる学生が少なかった。その授受行為を描写するために、どちらの補助動詞を使えばいいのか判断がつかず発話ができなかった学生もいた。さらには、「～（が）～てあげる」を代用して誤った回答をする学生もいた。

2. 「～（が）～てくれる」と「～（に）～てもらう」の正しい使い方

2.1 調査目的

ある授受行為を描写した絵を見せて、その恩恵・利益の授受方向性を話者（被験者＝留学生）が受益者として「～（が）～てくれる」か「～（が）～てもらう」

のいずれかを使って正しく言語化できるかどうかを調べた。そのどちらの使用もなく無回答のまま答えられなかった学生数も調べた。さらに、間違っ「～（が）～てあげる」を誤用した例も加えることにした。特に、英語を母語とする日本語学習者が絵の中で描写されている恩恵・利益の授受方向性を受益者としての話者の目を通して正しく表現できるかどうかを調査した。

2.2 調査対象

本大学に 2016 年度春学期・秋学期在籍した会話レベル 3、レベル 4 の留学生、合わせて 28 人。レベル 3 は一年から一年半の日本語学習経験を持ち、レベル 4 では一年半から二年の学習歴を持つ学生である。「やりもらい表現」は、本動詞（「～あげる / ～くれる / ～もらう」）（『げんき II』Lesson 14）と補助動詞（「～てあげる / ～てくれる / ～てもらう」）（『げんき II』Lesson 16）として分けて導入している。両レベルとも、「～（が）～（て）くれる」「～（に）～（て）もらう」「～（が）～（て）あげる」の本動詞・補助動詞共に既習文法である。

2.3 調査方法

両レベルとも春学期・秋学期期末試験の口頭試験の一部として行われ、試験官（担当教師）が被験者（留学生）にある授受行為が描写されている絵を見せて、その恩恵・利益の授受方向性を受益者としての話者の目を通して、短い文（質問文）について答えさせる。例えば、お父さんが話者に鞆を買ってくれた絵を学生に見せて、「素敵な鞆ですね。自分で買ったんですか」（絵 1）という質問を教師がする。そして、その質問に学生が受益者として授受表現の補助動詞「～（が）～てくれる」「～（に）～てもらう」のいずれかの授受補助動詞を使って答えるという質問・回答形式を取った。

この質問・回答形式では、絵に描かれている恩恵・利益の受益者が学生であることを質問に答える前に確認する必要があった。つまり、「素敵な鞆ですね。自分で買ったんですか」という質問に対して、受益者（鞆をもらった者）は話者の学生であることを確認し、その話者の目を通して当該の授受行為を表現するということがあった。例えば、「いいえ、お父さんが買ってくれたんです」「いいえ、お父さんに買ってもらったんです」と答えられるような発話設定が必要であった。

この調査に当たって使われた絵とそれに関わる質問、さらに、その質問に答える

適切な授受表現の回答は次のとおりである：

絵 1: 素敵な靴ですね。自分で買ったんですか。

(いいえ、お父さんが買ってくれたんです / お父さんに買ってもらったんです)

絵 2: 日本語が上手になりましたね。

(ええ、先生が教えてくれたんです / 先生に教えてもらったんです)

絵 3: 素敵なセーターですね。自分で作ったんですか。

(いいえ、お母さんが作って (編んで) くれたんです / お母さんに (編んで) 作ってもらったんです)

絵 4: 晩ご飯、自分で作ったんですか。

(いいえ、お母さんが作ってくれたんです / お母さんに作ってもらったんです)

絵 5: いい写真ですね。自分で撮ったんですか。

(いいえ、ウェ이터が撮ってくれたんです / ウェ이터に撮ってもらったんです)

絵 6: 自転車がこわれましたね。自分でなおしたんですか。

(いいえ、友だちがなおしてくれたんです / 友だちになおしてもらったんです)

絵 7: お金どうしたんですか。アルバイト、したんですか。

(いいえ、友だちが貸してくれたんです / 友だちに貸してもらったんです)

絵 8: 道に迷いましたか。

(いいえ、店の人が教えてくれたんです / 店の人に教えてもらったんです)

絵 9: 漢字たくさん知っているんですね。

(ええ、友だちが教えてくれたんです / 友だちに教えてもらったんです)

絵 10: おいしそうなアイスクリームですね。

(ええ、お父さんが買ってくれたんです / お父さんに買ってもらったんです)

絵 11: 病気だったら、ご飯を作れませんね。

(ええ、でも友だちが作ってくれたんです / 友だちに作ってもらったんです)

2.4 調査結果

絵 1 から絵 11 のそれぞれの授受表現の総数の内で、レベル 3 の留学生 20 人では、「～(が)～てくれる」を使った例が (98)、「～(に)～てもら」を使った例が (68) であった。また、「～てあげる」の例が (17)、間違った回答例、回答できない例がそれぞれ (0)、(37) であった。一方、レベル 4 の留学生 8 人では、「～てくれる」を使った例 (44)、「～てもら」を使った例 (25) であった。「～てあげる」

の例が (13)、さらには、誤回答 (3)、無回答 (3) であった。

ただし、両レベルとも「～(が)～てくれる」「～(に)～てもらう」に伴う適切な助詞「が」「に」の使用に関しては、「～てくれる」「～てもらう」のいずれかを使って表現した例の中で、その助詞の使い方に誤りが認められたものは別に記すことにした(例、助詞-正 / 誤)。また、「～んです」モダリティの接続活用の間違い、時制の間違い等に関しては本調査の目的に直接関わるものではないと判断して、授受表現の誤回答の例としては加算しなかった。誤回答とみなされたものはすべて授受補助動詞の「～てくれる」「～てもらう」「～てあげる」を使わずに間違った他の形式を使用した例に限定したものであり、無回答は発話が認められなかったものの例である。

レベル 3 (20) 人

表 1

	～てくれる		～てもらう		～てあげる	誤回答	無回答
	(助詞)	(助詞)	(助詞)	(助詞)			
	正	誤	正	誤			
絵 1	8	2	2	2	3	0	3
絵 2	6	4	1	5	1	0	3
絵 3	7	4	1	3	1	0	4
絵 4	5	3	2	3	2	0	5
絵 5	8	1	2	4	1	0	4
絵 6	8	2	3	5	1	0	3
絵 7	6	2	1	5	2	0	4
絵 8	5	4	3	4	2	0	2
絵 9	5	4	1	5	2	0	3
絵 10	5	4	3	4	1	0	3
絵 11	6	1	1	8	1	0	3

	～てくれる		～てもらう		～てあげる	誤回 答	無回答
	(助詞) 正	(助詞) 誤	(助詞) 正	(助詞) 誤			
絵 1	1	3	2	0	1	1	0
絵 2	2	2	2	0	2	0	0
絵 3	2	2	1	1	0	1	1
絵 4	2	2	2	2	0	0	0
絵 5	2	0	1	2	3	0	0
絵 6	1	3	1	1	1	1	0
絵 7	2	3	0	1	2	0	0
絵 8	2	3	0	1	1	0	1
絵 9	2	2	0	2	1	0	1
絵 10	2	2	1	1	2	0	0
絵 11	2	2	2	2	0	0	0

絵 1 から絵 11 までの授受表現では、両レベルとも「～てくれる」か「～てもらう」かのいずれかを使った学生数の比較では、「～てくれる」で表現した学生の方が多いが、際立った重要な差異が認められなかった。つまり、それぞれの絵で描写された授受行為に依る恩恵・利益の方向性は「～てくれる」であれ「～てもらう」であれ、どちらか一方だけを優先してより頻繁に使うという調査結果は得られなかった。言い換えれば、そのどちらの表現を使っても、求められた当該の授受行為の恩恵・利益の移動が表現できるということを理解しているようだ。

だが、「～てくれる」「～てもらう」といづれかを使って表現しようとはしているものの、それぞれの補助動詞の授受の方向性に適切な助詞の使い方に誤りが認められた。「～(が)～てくれる」と「が」が選択されるべきところを「に」が使われたり、また、逆に「～(に)～てもらう」と「に」になるべきところを「が」や「は」が使われた例であった。これは、ある授受行為を表現するには「～てくれる」「～てもらう」を使うということは認識しているけれども、その適切な助詞の使い方が理解できなかった例である。

一方、「～てあげる」を使って恩恵・利益の方向性を表現しようとした例も認められた。これらの例では、「～てあげる」を英語の“give”という授受動詞に対応するものとして使用されたと考えられるが、受益者としての話者からの視点でその授受の方向性を理解できていなかった例だと言えよう。つまり、“give”である「～てあげる」を使えば日本語でも正しい表現ができると思いついでいるようだ。これは、受益者の視点でその授受行為を描写しているのではなくて、恩恵・利益の与え手の目から通して表現した例になっている。

さらには、授受動詞（補助動詞）を使わずに他の形式を使った誤用例（例えば、可能文が使用された）も認められた。これらの誤用例と無回答例の数を見ても、絵で描写された授受行為を受益者の目を通して恩恵・利益の方向性を言語化することの難しさがあらためてわかった。

3. 「～（が）～てくれる」「～（に）～てもらう」の使い方が難しくなる理由

3.1 文法項目を順序良く網羅的に教えるという文型至上主義

ほとんどの日本語初中級の教科書では文型積み上げ式を中心にしたまま、文法形式の定着を図ることが重要視されている。導入すべき文法形式を順序良く網羅的に教えるべきであるとする教師側の固定観念（「文法至上主義」）が見受けられる（嶋田 2012）。「やりもらい表現」の導入に際しても、本動詞「～あげる（やる） / ～くれる / ～もらう」、補助動詞「～てあげる（やる） / ～てくれる / ～てもらう」と三項対立の動詞（補助動詞）を一度に網羅する文型導入を採用している教科書が多い。この文型至上主義に則って三項対立の「～てあげる（やる） / ～てくれる / ～てもらう」を網羅的に導入すると、同じ「やりもらい表現」でも、英語では“give”と“receive”の二項対立になっているため、英語を母語とする日本語学習者にとっては、この三項対立の動詞（補助動詞）の使い方が難しくなってしまう。

英語と日本語では「やりもらい表現」を言語化するための動詞（補助動詞）の使い方の概念が基本的に異なっている。つまり、「～てあげる（やる）」には、それに対応するものとして“give”が、「～てもらう」には“receive”が使われるが、「～くれる」には、それに対応する概念が英語の語彙には存在しないからなのである。普通、「～てくれる」の英語対訳では“(somebody) gives (me)”と訳され“give”として扱われているが、そうすると、その同じ“give”に対応する基本的意味でも「～てあげる」と「～てくれる」の使い方の違いが不明瞭になってくる。さらには、ある

授受行為の受益者として何らかの恩恵・利益を受けたのにもかかわらず、“receive”なのか“(somebody) gives (me)”の“give”なのか、それら意味上の相違点が判らず、「～てもらおう」と「～てくれる」の使い方に混乱が生じるのである（藤田 2000）。

また、「～（が）～てあげる」「～（が）～てくれる」「～（に）～てもらおう」と、授受行為の与え手・受け手を適切な助詞で表現することが求められる。話者の目を通した「話者の視点」から、誰が誰に恩恵・利益を与えるのか、それとも、誰が誰から恩恵・利益を受けるのか、その受益の方向性を理解できなければ正しい文が構成できないことになる。

3.2 日本語の主観的把握と英語の客観的把握

日本語と英語では、ある状態や出来事を描写する場合、話者がその状況把握の仕方によって異なった言語化がなされることが知られている（金谷 2003；岸上 2016；森田 1998, 2002；矢吹ソウ 2015）。例えば、日本語で「ここはどこですか」と見知らぬ居場所を訊ねる場合、英語では、“Where am I?”（直訳「私はどこにいますか」）という問いかけになってしまう。この違いが出てくる理由は、日本語では、話者の目を通して自らの周りに見知らぬ景色が見えているから「ここはどこですか」という質問がされ、一方、英語では、その見知らぬ場所の中にその話者自らが存在していることを話者自身が俯瞰的に眺めて “Where am I?” と質問しているのである。言い換えれば、話者が自らの分身を見知らぬ景色の中に置いたまま “Where am I?” と訊ねているのである。つまり、日本語は話者の視点に立った主観的な状況把握で状態や出来事を表現するのに対して、英語は話者が一旦その状態や出来事の外に出て、外からその状態や出来事を客観的に表現する言語なのである（池上 2006, 2007；森光 2007）。

日本語の「やりもらい表現」でも、物や恩恵・利益の授受行為（誰かが誰かに何かをあげる / 誰かが誰かに何かをもらう）を話者の目を通して見る主観的な状況把握に基づいて行われる表現である（藤田 2000；横田 2009）。つまり、日本語の「やりもらい表現」は話者の視点で立った状況把握の捉え方によって、その言語化が異なってくるということである。例えば、「お父さんが私に鞆を買ってくれた」（絵 1）では、この授受行為の恩恵・利益の与え手は「お父さん」であり、その受け手は「私」である。そして、この授受行為を話者である「私」の目を通してこの授受行為を表現している。また、この同じ授受行為を話者である「私」の目を通して「私はお父

さんに鞆を買ってもらった」と表現することも可能である。つまり、話者である受益者の「私」の視点から同じ授受行為を「～てくれる」と「～てもらう」の両方を使って表現できるのである。

一方、英語では、恩恵・利益の授受行為を話者が客観的に把握して、その行為を外から俯瞰して表現する（横田 2009）。言い換えれば、その授受行為の參與人として、話者は自らの分身をその行為の中に留めながら描写する表現となる。日本語の授受表現にあるように、「お父さんが私に鞆を買ってくれた」「私はお父さんに鞆を買ってもらった」と受益者としての話者の目を通して描写された授受表現ではない。一旦、話者が授受行為の外に出れば、恩恵・利益の移動に関して授受行為の參與者ではなく観察者として客観的に描写できるのである。それ故、恩恵・利益の与え手である父親のなす授受行為を客観的に描写するために、“Father bought me a bag”と話者の目を離れた父の視線でこの授受行為が表現されているのである。「父が私に鞆を買ってくれた」の英語対訳が“Father bought me a bag”となるのは、話者が観察者の目で客観的に見た授受行為を“buy”という動詞で表しているからである。

英語を母語とする日本語学習者にとっては、話者の授受行為の状況把握によって表現が異なるという日本語と英語の発想の違いに注意しなければならない。授受行為を客観視する英語話者にとっては、話者の目を通して表現する日本語の授受行為の方向性を理解するのが難しいのであろう。それ故、「～（が）～（て）あげる」「～（が）～（て）くれる」「～（に）～（て）もらう」を導入する場合、話者の目を通して見た授受行為（「話者の視点」）に注意しなければ次のような不自然な日本語ができあがってしまう。例えば、“Kato bought me a movie discount coupon”という英語文はその授受行為を客観的に表現したもので、“bought”を使って表現しているが、これを日本語訳すると次のようになってしまう恐れがある：

- (1) 加藤さんが私に映画の割引券を買ってくれた
- (2) ? 加藤さんが私に映画の割引券を買ってあげた
- (3) * 加藤さんが私に映画の割引券を買ってもらった

日本語では、話者である「私」の視点でこれらの授受行為を表現するわけであるから、(1)の文だけが正しい日本語になる。(2)の「あげる（“give”）」の授受補助動詞は話者の視点ではなく、与え手の「加藤」の視点に立った表現である。また、

(3) の「もらう (“receive”)」を使う場合、その話者である「私」の視点で見るわけだから、話者である「私」が主語になる授受行為を表す文を作らなければいけない。

3.3 「～ (が) ～てくれる」「～ (が) ～てあげる」に含まれる恩恵授受の意味

「～ (が) ～てくれる」という授受補助動詞を使った日本文では、すでに恩恵・利益の授受行為の移動が含意されている (原田 2005; 山田 2002)。例えば、「父がアイスを買ってくれた」という文を英語訳すると “Father bought me ice cream” となる。ただ、日本語での授受行為の恩恵・利益の意味を伝えることが理解できなければ、次のような不自然な日本文が出来上がってしまう：

(4) ? 父が私にアイスを買いました

“For me” の意味が「～てくれる」を使うことで、その恩恵の意味がすでに伝えられていることを理解しなければならない。それ故、英語の “Father bought me ice cream (for me)” と “for me” を含んだ「～てくれる」を使う文を作ることが、英語を母語とする日本語学習者にとっては難しくなってしまう。

また、同じように「～ (が) ～てあげる」でも、例えば、“I read a book to my child” では「(私は) 子どもに本を読んだ」と「(私は) 子どもに本を読んであげた」と異なった表現になってしまう。この「～てあげる」には “for (someone)” の意味がすでに含まれているのである。

3.4 「～ (が) ～てくれる」は「感謝」「～ (に) ～てもらう」は「依頼」

日本語の「～ (が) ～てくれる」と「～ (に) ～てもらう」が持つ基本的な授受行為の意味が異なっている。例えば、「～てくれる」には「感謝」の意味が、「～てもらう」には「依頼」の意味が含まれている (原田 2005)。

- (5) 病気で寝ていると、友人がご飯を作ってくれた
- (6) * 病気で寝ていると、友人にご飯を作ってもらった
- (7) 汗をかいていたら、友人が窓を開けてくれた
- (8) * 汗をかいていたら、友人に窓を開けてもらった

これら (5) と (7) の「ト節」と「タラ節」では、その複文後半では「～てくれる」だけが正しい表現になる。これは、「ト節」「タラ節」に続く主節文には意志動詞が使えないルールがあるからである。ここで使われている「くれる」は、無意志動詞であり、話者の意志に関わりなく、授受行為の誰か他の参加者が話者に向けて恩恵・利益を話者に施したものだからである。言い換えれば、「病気で寝ていると / 寝ていたら」という困った状況に対して、授受行為の話者以外の他の参加者が話者のために恩恵・利益を自主的に与える形になっている。この場合、「くれる」は話者からの「感謝」を表すための授受表現になる。

一方、「もらう」は話者の意志から誘導された意志動詞であり、「テ形」接続などで続けた後には依頼文が続く。例えば、

- (9) 友人に電話して、家に来てもらった
- (10) * 友人に電話して、家が来てくれた
- (11) お願いして、友人に窓を開けてもらった
- (12) * お願いして、友人が窓を開けてくれた

(9) と (11) にあるように、「友人に電話して / お願いして」のように、前もって授受行為の話者からの依頼性が明確に確立されているものでは、後に続く文には意志性の働きかけを持つ「もらう」が使われる。無意志性の性格を持つ「くれる」は使われない。これは、授受行為が話者の依頼に基づいて行われたものであるという性格が強く、その依頼によって授受行為の他の参加者から恩恵・利益を受けたという形ができていたのである。つまり、「もらう」が使われるのは、主に話者からの依頼が前提条件になっている場合が多い。⁽¹⁾

「～(が)～てくれる」「～(に)～てもらおう」の持つ「感謝」と「依頼」の意味を理解せずに、授受動詞(授受補助動詞)の形式・助詞の導入だけに専念すると、話者が言わんとすることが正しく伝えることができなくなる可能性が高い。つまり、学習者が「～てくれる」(感謝)と「～てもらおう」(依頼)はそれぞれどういう発話状況の時に使う表現なのかを理解できていないからである。授受行為の方向性に気を付けても、伝えようとする話者の発話意図が正しく「～てくれる」(感謝)と「～てもらおう」(依頼)に反映されなければならない。話者の発話意図が反映されず、ただ無目的な文法指導だけでは話者が一番言いたいことが言えなくなる。「やりもらい

表現」は、話者がある恩恵・利益を受けたので感謝を言いたい時、また、依頼して恩恵・利益を受けた時に使う表現であると理解すればいいと思う。文法はあくまでも言いたいことをことばにして、相手に伝えるための手段だからである(白川 2010)。

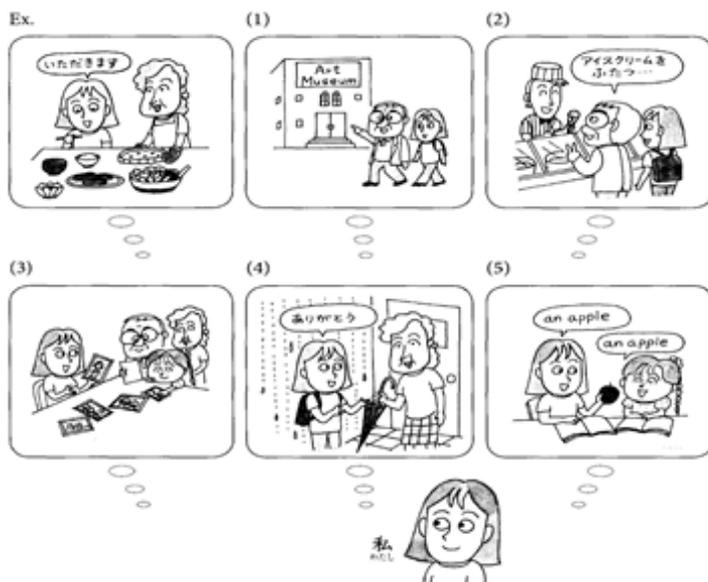
4. 「～(が)～てくれる」は「感謝」「～(に)～てもらう」は「依頼」の指導方法

4.1 「～(が)～てくれる」「～(が)～てあげる」の指導方法

日本語の「やりもらい表現(授受表現)」では、「～(て)あげる」「～(て)くれる」「～(て)もらう」という三項対立、一方、英語では“give”と“receive”の二項対立になっている。「～(て)あげる」と「～(て)くれる」が“give”の概念に対応し、「～(て)もらう」が“receive”にそれぞれ対応する。この三項対立と二項対立の相違が英語を母語とする日本語学習者には難しい文法項目となる。例えば、次のような発話練習では、この三項対立と二項対立との相違が発話を難しくするようである：

You visited a Japanese family last weekend. Describe what they did for you and what you did for them using ～てくれる / ～てあげる / ～てもらう.

Example: お母さんが晩ご飯を作ってくれました。
お母さんに晩ご飯を作ってもらいました。



『初級日本語げんき II』 p. 110』

そこで、「～（て）もらう」の導入は後に回し、同じ“give” の概念を持つ「～（て）あげる」と「～（て）くれる」だけをまず導入し、その違いに留意しながらその使い方の違いを指導する方法を提案する。「～（が）～（て）あげる」には話者からの視点で恩恵・利益を授受行為の他の参与者に与えるという授受行為の方向性があり、また逆に、「～（が）～（て）くれる」には話者の視点で他の参与者から恩恵・利益を受けるという方向性を確立することも可能になる。この場合、話者の視点からの主観的状況把握に基づいた授受表現になり、ただ、その恩恵・利益の与え手と受け手が異なるだけである。助詞の使い方も誰（が）誰（に）「与える」か（または、「受ける」か）の違いだけである。つまり、一つの授受表現を描写する場合、話者が見た主観的把握を保ちながら、その授受表現を「～てあげる」「～てくれる」で表現すればいいだけである。例えば、

(13) 私がともだちにアイスを買ってあげた

(14) ともだちが私にアイスを買ってくれた

これらの授受補助動詞には、「あげた」と「くれた」が対照的に使われているだけで、助詞の使い方は同じである。ただ、その恩恵・利益の受け手が「ともだち」になるのか「私」になるのか、また、その与え手が「私」になるのか「ともだち」なのかの違いだけである。英語訳では“I bought ice cream for my friend”か“My friend bought me ice cream”になる。ここでは、“give” の概念を保ちながら恩恵・利益の授受方向性を変えただけである。このような導入方法では「あげる」と「くれる」の使い方の違いが分かりやすくなると思う。

また、「～（が）～（て）くれる」には「感謝」の意味が込められていることに留意して、その「感謝」の気持ちを伝えたいという話者の発話意図を表現できる発話練習を提案する。つまり、「感謝」の意を伝えたいという話者の言いたいことを言語化するということが肝要になってくる。例えば、

(15) 困っていると、ともだちが助けてくれた

(16) 困っていたら、ともだちが助けてくれた

「困っていると / 困っていたら」と事実的用法の「ト節」「タラ節」を加えた発話練習を提案する。ここで練習される授受表現は「～てくれる」だけに限り、受益者として恩恵・利益を受けた話者の目から見た例である。この場合、発話練習をする話者は受益者であることを確認する必要がある。例えば、

You are sick in bed. Tell what your friend did for you (to show your appreciation) using ~てくれる.

Example: 困っていると、ともだちが晩ご飯を作ってくれました。

<Ex.> Friend made dinner for you

1. help with homework
2. do laundry
3. clean your room
- ...



(絵)『初級日本語げんき II』 p. 108

<解答例>

1. 困っていると、ともだちが宿題を手伝ってくれました。
2. 困っていると、ともだちが洗濯をしてくれました。
3. 困っていると、ともだちが部屋を掃除してくれました。

また、同じ授受行為を描写するのに、話者が恩恵・利益の与え手として「~てあげる」を使う発話練習ができる。今度は、話者が「~てあげる」を使って恩恵・利益を与えるという授受行為の方向性を確認する必要がある。形式的には、授受補助動詞の「~(が) ~てあげる」になる。例えば、「ともだちが困っていたから」という理由を述べる「カラ節」に続く複文後半の表現を発話練習する：

Your friend is sick in bed. Tell what you did for your friend (for a favor) using ~あげる.

Example: 困っていたから、晩ご飯を作ってあげました。

<Ex.> You made dinner for your friend

1. do dishes
2. take him to the hospital
3. go to a bank and withdraw money
- ...



(絵)『初級日本語げんき II』 p. 108

<解答例>

1. 困っていたから、お皿を洗ってあげました。
2. 困っていたから、ともだちを病院に連れて行ってあげました。
3. 困っていたから、銀行に行ってお金をおろしてあげました。

この発話練習では、「ともだちが困っていたから」という状況を踏まえ、恩恵・利益の与え手である話者が授受行為を行うという設定である。

「～(が)～てくれる」と「～(が)～てあげる」は同じ “give” という概念を持つ授受補助動詞であるので、その文法形式は比較的安易に構成できるのではないかと思う。「～(が)～てくれる」には「困っていると / 困っていたら」という「ト節」と「タラ節」を加えて発話することを忘れてはいけない。

4.2 「～(に)～てもらう」の指導方法

「～(に)～てもらう」を使う授受行為では、話者が恩恵・利益の与え手に対して予めお願いをしたという「依頼性」を強調する必要がある。話者の目を通して見た主観的把握に基づいて話者がその授受行為の参与者から恩恵・利益を受けたという設定になる。話者が言いたい発話意図は依頼した通りに恩恵・利益を受けたということである。言い換えれば、この「もらう」という授受行為は英語の “receive” の概念に対応させたものになり、強調すべきことは話者の依頼に基づいて恩恵・利益の与え手から “receive” 行為を受けたという授受表現の言語化になる。

そのために、「お願いして」という「テ形」継続の節を加え、それに続く文を作る発話練習を提案する。形式的には「～に～てもらう」という形になる。例えば、

You are sick in bed. Tell what you asked your friend to do (for you)

using ～てもらう.

Example: お願いして、ともだちに晩ご飯を作ってもらいました。

<Ex.> Friend made dinner for you

1. help with homework
2. do laundry
3. clean your room



(絵) 『初級日本語げんき II』 p. 108

<解答例>

1. お願いして、ともだちに宿題を手伝ってもらいました。
2. お願いして、ともだちに洗濯をしてもらいました。
3. お願いして、ともだちに部屋を掃除してもらいました。

この発話練習では、話者（受益者）の目を通して恩恵・利益を受けたという授受行為を発話するものになる。「～（が）～てくれる」にある「感謝」の意を伝えたくて表現するのではなく、話者の「依頼」に基づいて恩恵・利益を受けたということを伝えたいための表現である。この「～てくれる」（感謝）と「～てもらう」（依頼）の相違点を強調すれば、この二つの授受表現の違いが分かりやすくなると思う。

5. まとめ

英語を母語とする日本語学習者にとって、「やりもらい表現」の習得が難しくなる理由を述べ、その解決策として「～てくれる」（感謝）、「～てもらう」（依頼）という意味の違いに留意した指導法を提案した。「あげる / くれる / もらう」という三項対立に対して、英語の “give” “receive” の二項対立になっているため。「あげる / くれる / もらう」を一度にセットで教えずに、「あげる」と「くれる」をまず指導し、その後で「もらう」を導入することを薦める。何故かという英語の “give” の概念に対応する「あげる / くれる」がそのまま使えるからである。「もらう」に関しては “receive” を対応させた練習を薦める。

また、日本語と英語の発想の違いから来る「主観的状況把握」と「客観的状況把握」の設定に基づいて、話者の視点に立った授受行為の方向性を明確にする必要がある。つまり、話者はどちらの立場（恩恵・利益の受け手か与え手か）に立って授受行為を表現しているのかを明確にしなければならない。特に、英語を母語とする学習者に対しては授受行為を客観的に俯瞰視する傾向があるので、ソトからウチへ移行する状況把握を指導することが必要になる。

さらに、「あげる / くれる / もらう」の三項対立の形式ばかりを重要視する無目的な文法教育から、目的を持ったコミュニケーションをとるための発話練習をすることが肝要になる。話者に自分が言いたいことを考えさせるために、「～てくれる」を使うときは「感謝」の意を伝える時、そして「～てもらう」を使うときは「依頼」をして何かを受け取る時だということを認識させる。文法項目の定着が予想される

発話練習をするためには、学習者に自分の言いたいことを考えさせることが大切になってくるからである(細川 2004)。文法項目として導入された「やりもらい表現」を通して、学習者が言いたいことをことばにするというコミュニケーションの基本理念を再確認し、学習者の視点に立った初中級日本語教育の文法シラバスの再構築が必要になる(小林 2010)。文法形式を定着させることを目的とし、ただその活用の形を発話するモノローグではなく、他者との関係を作るダイアログとして、言いたいことをことばにする必要がある。「～てくれる」には「感謝」の意を、「～てもらおう」には「依頼」の意を添えての授受表現の発話練習を提案した。何故なら、学習者に自分の言いたいことを考えさせる必要があるからである。学習者に自分の言いたいことを考えさせ、それをことばにしてコミュニケーションが図れるように、教師が学習者を誘導する発話環境を設定する必要がある。

注

(1) 「～てくれる」と「～てもらおう」には話者の働きかけ作用や依頼性の有無について述べたが、次のように「～てくれる」「～てもらおう」には大きな差異が見られない場合がある。

- (1) 友人の家ではごちそうしてくれた
- (2) 友人の家ではごちそうしてもらった
- (3) 友人が「頑張って」と励ましてくれた
- (4) 友人に「頑張って」と励ましてもらった (原田 2005, p. 208)

これは、依頼性を明確に確立するための先行する句・節が付与されていないからだと考えられる。

参考日本語教科書

『初級日本語げんき II』(2011) The Japan Times

参考文献

池上嘉彦 (2006) 「<主観的把握>とは何かー日本語話者における<好まれる言い回し>」『言語』35(5), pp. 20-27.

池上嘉彦 (2007) 『<主観的把握>ー認知言語学から見た日本語話者の一側面』上海外国語大学「日本学研究国際シンポジウム」講演要約

金谷武洋 (2003) 『日本語文法の謎を解くー「ある」日本語と「する」英語』ちくま

新書

- 岸上由佳 (2016) 『なぜ英語を母語とする日本語学習者は「～たがる」を使わないのか』 関西外国語大学 未発表論文
- 小林ルミ (2010) 「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚志 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 (pp. 187-205). くろしお出版
- 白川博之 (2010) 「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚志 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 (pp. 43-62). くろしお出版
- 原田登美 (2005) 『恩恵・利益を表す<授受表現>と<敬意表現>の関わり—特に「～てくれる」を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る』 カナダ日本語教育振興会年次大会 口頭発表論文
- 藤田直也 (2000) 『日本語文法 学習者によくわかる教え方』 アルク
- 細川英雄 (2004) 「クラス活動の理念と設計」細川英雄 (編) 『考えるための日本語』 (pp.8-43) 明石書店
- 森光有子 (2007) 「主観的把握と客観的把握—なぜ日本語には擬声語・擬態語が多いのか」『相愛大学研究論集』 23, pp. 19-45.
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現』 中公新書
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房
- 矢吹ソウ典子 (2015) 「日本語学習者の作文に見られる視点の表現—「視座」にかかわる動詞の使用を中心に」 2015 CAJLE Annual Conference Proceedings
- 山田敏弘 (2002) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究」『日本語学』21, pp. 80-89.
- 横田隆志 (2009) 「「日本語の視点」から見た授受表現の導入方法についての一考察」『北陸大学紀要』 33, pp. 143-151.

(shikaura@kansai.ac.jp)